



雅文小說集

全

昭和七年九月十日
昭和七年九月十四日

印刷
發行
有朋堂文庫
雅文小說集
(非賣品)

編輯者

塚本哲三

東京府下大久保町西大久保二百三十六番地

印刷者兼
發行者

三浦捷一

東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷所

東京市神田區錦町三丁目九番地
合資
會社
有朋印刷社

發行所

東京市神田區錦町一丁目十九番地
有朋堂書店

不許複製

緒言

本書は文化文政時代に隆盛を極めたる、所謂讀本よみほんと稱するものの源流たり、若くは灌流たりし英草紙はなぶさざうし、繁野話しげくやわ、西山物語にしやまものがたり、本朝水滸傳、つくし船物語、手枕たまくらの六篇を收めたり。

英草紙、繁野話は、共に近路行者の作、前者は古今奇談前篇と題し、後者は同後篇と題せり。もと支那清朝の今古奇觀を粉本として作れるもの、其の古今奇談といへる冠稱は、即ち其の出所を標榜せるものか。文章頗る漢臭に富み、まゝ原文を蟬脱せざる所さへ見ゆれど、詞藻遒勁、情意兼備はり、論議の筆亦大に見るべきもの多し。江戸讀本よみほんの先驅をなし、後の稗史小説に及ぼせる影響尠からざるが中に、上田秋成の兩月物語は、其の最も顯著なるものの一なり。作者近路行者は、本名を都賀庭鐘といひ、通稱六藏、字は公聲、大江漁夫、辛夷館主人等の別號あり。大阪の人にして、儒醫を業とし、書畫を善くせり。本書の外、なほ莠句冊ひつぎぐさ、狂詩選、大江漁唱、辛夷館隨筆、康熙字典考異等の著あり。太田南畝の一話一言には上田秋成の師にして、兼葭堂の親友なりきと見え、又近頃博士藤井乙男氏の研究

によれば、通俗醫王者婆傳の譯者巢古主人といへるも此の人なりといふ。

本篇の底本は、英草紙は寛延二年九月、繁野話は明和三年の印行に係り、各五冊に分る。

西山物語は、建部綾太里の作、明和五年刊行、上中下三冊あり。山城國西山の麓松尾の里なる大森七郎同八郎の二人、從兄弟の間なりしが、古刀の祟によりて相恨み、兩家の子女の間に結ばれし婚約の破綻となり、遂に一場の慘劇を生じ、後また互に和睦するに至りし筋を、當時の巷説に基づきて作りしもの、文章は純然たる擬古體にして、一字一句も古典に基き、一々其の出處を明にせり。之れ古文の法格を普及せしめんとの意にあらずんば、或は彼の英草紙の如き、極端なる漢譯小説に對する反動に出で、春滿の國學、眞淵の萬葉など、精神に於て其の揆を一にせるものにあらずやと思はる。

本篇は専ら文化十二乙亥十一月九日寫初、翌年正月十八日寫終早崎益道とある寫本に據りて校訂せり。

作者綾太里は南部の人、字は孟喬、初め涼袋と號し、後涼岱と改む。吸露庵、寒葉齋等の

號あり。俳諧を希因に學び又國學を好み、其妻をして眞淵に就て學ばしめ、己また其説を傳へたりといふ。後片歌^{かたうた}を唱へ出し、自ら片歌道守と稱せり。安永三年五十三歳を以て歿す。本朝水滸傳も亦綾足の作、一名を吉野物語といふ。惠美押勝、僧道鏡等の事迹を漢土の水滸傳に擬して作れり。曲亭馬琴嘗て本書を評して、其の文を行るに古言を用ゐながら、往々俗言俚語の錯出せるは頗る不調和たるを免れざれども、漢土の水滸を摸して、而も其の古轍を踏まざるはさすがにして、實に今の讀本の嚆矢と稱すべしと云ひ、なほ、その不幸にして時好に適せず、未完に終りしは痛惜すべしといへり。馬琴の八犬傳が源を此の水滸に求めたるは、右の細評あるによりても徴すべきなり。

本書初篇十卷は刊本にて行はれたれども、後篇十五卷は寫本にて稀に傳はり、第三篇は遂に成らずして終れり。本篇收むる所は、即ち初篇十卷にして、底本は寛政十三年の補刻本によれり。

つくし船物語は、村田春海の作、上下二冊あり。文化十一年二月、むすめ村田たせ子が高田

與清とはかりて刊行せるものにして、もと大井三位物語といひ、「つくし船」はその第一巻の名なりしに、第二巻以下遂に成らずして止みしより、此のたび物語の二字を加へて單行せしめしものなること、原本の凡例に見ゆるが如し。

手枕一冊、本居宣長が、源氏物語に六條御息所の事の始の見えざるを補はんとて、文章も紫女の筆つきに倣ひて物したりしを、尾張の人大館高門といへるが請ひ求めて梓に上せ、同好の人々に頒ちしなり。

今これら諸本を校訂するに當りては、何れも前に述べたる所の底本又は流布の原本によりて、振假名の假名遣を一定し、會話に鉤識を施し、鰲頭に略註を加へたる外、語格宛字等一に原本に準據し、私意を以て改竄せず。但つくし船物語は原本に旁註せる所の漢字を本文中に組込みて、原文の假名を之れが振假名とし、又手枕には間々新に漢字を配して、共に通讀上の便を圖る事となしたり。

大正四年一月

校訂者 松山米太郎

雅文小説集 目録

古今奇談英草紙

一一六

第一卷

- 一 後醍醐の帝三たび藤房の諫を折く話……………五
- 二 馬場求馬妻を沈めて樋口が聳と成る話……………七

第二卷

- 三 豊原兼秋音を聽きて國の盛衰を知ろ話……………三
- 四 黒川源太主山に入つて道を得たる話……………七

第三卷

- 五 紀任重陰司に至り滯獄を斷くる話……………七

第四卷

- 六 三人の妓女趣を異にして各名を成す話……………二二
- 七 楠彈正左衛門不戦して敵を制する話……………二六

第五卷

- 八 白水翁が賣卜直言奇を示す話……………二八
- 九 高武藏守婢を出して媒をなす話……………三二

古今奇談繁野話

一七—三五〇

第一卷

- 一 雲魂雲情を語つて久しきを誓ふ話……………二八
- 二 守屋の臣殘生を草莽に引く話……………二九

第二卷

- 三 紀の關守が靈弓一旦白鳥に化する話……………二〇六
- 四 中津川入道山伏塚を築かしむる話……………二九

第三卷

五 白菊の方猿掛の岸に怪骨を射る話・三五

白菊の下・二五二

第四卷

六 素卿官人二子を唐土に携ふる話・二七〇

七 望月三郎兼舍龍窟を脱れて家を續

ぎし話・二八二

第五卷

八 江口の遊女薄情を憤りて珠玉を沈

むる話・二九九

九 宇佐美宇津宮遊船を飾つて敵を討

つ話・三三〇

西山物語

三五—四〇八

卷之上

こがれの巻・三五五

かへの巻・三五九

太刀の巻・三六四

卷之中

あやしの巻・三六九

琴の巻・三七五

文の巻・三七八

わかれの巻・三八二

卷之下

露の巻・三八八

よみの巻・三九七

ほきの巻・四〇六

本朝水滸傳

四〇九—五八四

卷之一

第一條 味稻の翁仙女と契りて百人の

子をまうく・四二一

第二條 太宰府の阿曾丸勅をうけて弓

削道鏡を召し參る井高野天皇

卷之二

道鏡を愛で初めたまふ……………四二五

第三條

藤原倉鷹石村主奏するによりて藤原の惠美押勝を討たしむべき勅あり……………四三六

第四條

道祖土釣舟に召されて遁れ給ふ惠美押勝戦ひ負くる……………四三九

卷之三

第五條

豐丸角丸が骸を焼く并佐保の大道に首を梟くる……………四四〇

第六條

惠美押勝祖王を將奉りて伊吹山に隠る白猪老翁祖王を預り奉る……………四四六

卷之四

第七條

豐成が娘狹霧姫を道祖王に奉る押勝印を授けて七人の物部を國々に出し自ら東國に下る……………四五七

第八條

和氣真人清麻呂勅を受けて宇

卷之五

第九條

佐八幡大神宮に詣づ詣で終りて歸るさに巨勢の金丸を訪ふ……………四六八
清麻呂の教を奏すによりて道鏡に罪せらる巨勢金石清麻呂をたすく并金麻呂親子清麻呂も共に死す……………四七七

第十條

金麻呂親子清麻呂を將て紀伊の温泉に忍ぶ鼻彦軍書を講く……………四八四

卷之六

第十一條

守部が輩罪を宥されて清麻呂金麻呂が跡を追ふ清麻呂が妻子金石獵野に逢ひて紀伊の國に行く……………四九五

第十二條

山賊清麻呂が妻子を盗み去る明日香太刀金石に逢ふ并紀伊なる人々伊吹山に行く……………五〇二

卷之七

第十三條 忌部宿禰海道跡見武雄同じ

く武荒の兄弟に遇ひて清麻呂の妻子を救ふ井三人ともに清麻呂の捕はれを救ふ……………五二

第十四條 海邊鯉劔術を教ふ井奈良麻呂を立てゝ大將とし徒を集へて白山に登る……………五二四

卷之八

第十五條 二人の大將軍軍兵と徒を將て白山の窟に籠る井泰澄法師兵糧の事を謀る……………五三

第十六條 大伴家持泰澄に逢ふ井家持が放てる鷹を諸兄すゑもちて返し給ひ糧を白山に贈らしむ……………五三六

卷之九

第十七條 守大伴宿禰家持糧を白山に贈る井和爾部眞太刀家持の館に來る……………五四二

第十八條 清麻呂金麻呂手節の崎にて

卷之十

妻子に逢ひて共に將て伊吹山に登る……………五四八

第十九條 人置の眞鮪韓白の大神金を分つ井弓屋の俊雄隱妻を迎ふ……………五五六

第二十條 弓屋の俊雄人置の眞鮪訟す井高橋手力二王を救ふ……………五六五

つくし船物語

手 枕

五八五—六三四

六三五—六四八

隣家の方正先生余が文房に飲む。傍に英草紙はなぞさざうしの藁あるを把さつて、纔に其目そのめを見て是を置いて云ふ、足下倦つかれたれども尙青雲の志あり、此遊戲の書に目めを厭ふべし。余酒氣を帶びて笑うて答ふ、先生の言是なり、余また此書の爲に説あり。彼の釋子の説ける所、莊子が言ふ處、皆怪誕にして終に教となる。紫の物語は言葉を設けて志を見あらはし、人情の有る處を盡す。兼好が草紙は惟假初たゞかりそめに書けるが如くなれども、世を遁るゝ事の高きに趣を歸す。今の世大道を照すに人乏しく、光をつゝむ人はなほ更なれば、明教につかんと欲する人も、其懷璧の圓まじかならぬを玼瑕としてこれを顧みず。或はをしへを受くる者も、琢磨の意淺ければ眠を生じ易し。金玉の言耳悦ばしからぬ謂歟。近路千里の二人の主は、余が物覺えてより竹馬に鞭打むちうちし、夕影隣を遷されし朝も、行くに留るに形影の離れざるがごとく、素姓すじやうも亦余に齊ひししき一畝の民にして、耕いとまなきに、雨日の閑よりの時々、此草紙を記して同社中の茶話に代ふるの本意とす。原もとより名山に藏して後世を待つ物の物にあらずといへども、此書義氣の重き所を述べれば、昔より牛喘を問うて時の政まつりごとを知り、馬洗はせんの音を聞きて阿字をさとり、風の音に秋の深きを知

り、礎^{きんた}のひどきに冬の近きを思ふためしあれば、鄙言却て俗の儼^{いましめ}となり、これより義に本づき、義にすゝむ事ありて、半夜の鐘聲深更を告ぐるの助とならんこと、近路行者千里浪子の素心^{そしん}なる哉。こゝに足らざればかしこに餘りあり。此の二人生れて滑稽の道を辨へねば、聞^{きこ}を悦ばすべきなけれども、風雅の詞に疎^{うご}きが故に、其文俗に遠からず。草深き人となれば、市街の通言を知らず、幸にして歌舞伎の草紙に似ず。賜覽の君子、詞^{ことば}の花なきを以て英^{はなぶさ}の意を害する事なくして、兩生の幸ならんのみ。

寛延己巳の初夏十千閣の主人十千閣上に筆を操る

太 平 逸 民

古今奇談英草紙總目錄

第一篇

後醍醐帝三たび藤房の諫を折く話

第二篇

馬場求馬妻を沈めて樋口が聲と成る話

第三篇

豊原兼秋音を聽きて國の盛衰を知る話

第四篇

近路行者著

千里浪子正

黒川源太主山に入つて道を得たる話

第五篇

紀任重陰司に到つて滯獄を斷くる話

第六篇

三人の妓女趣を異にして各名を成す話

第七篇

楠彈正左衛門不戦して敵を制する話

第八篇

白水翁が賣ト直言奇を示す話

第九篇

高武藏守婢を出して媒をなす話

以上九篇

古今奇談英草紙

第一卷

一 後醍醐の帝三たび藤房の諫を折く話

黃門侍郎—中納言の唐名
尙書—十三經の一、古文尙書といふ政事の書
上卿—公事に與る公卿の上官

萬里小路藤房卿は宣房卿の子なり。幼より好んで書を讀み、博學強記和漢の才に富みて、早く黃門侍郎となる。建武の帝命じて尙書を講ぜしめ給ふに、よく其旨を解き得たりしかば、帝深く其才を愛し、常に左右に侍せしめ給ふ。元弘の變に帝武家にとらはれさせ給ふ折からも、藤房是に従ひ奉る。御開運の後つひに上卿となる。此時速水下野守といふもの、もとは三河の國の住人にて、足助重範が一族なるか、官軍没落してより東國に逃げ下り、こよかしここにくだまり、公家一統のときを待ち得て都に登り、萬里小路藤房卿について天氣を窺ひしに、速水が幸にやありけん、何事にや憂慮うるはしき折

からにて、不便に思召され、一箇の莊を宛て行はれ、一首の古歌を賜ふ。

あづま路にありといふなる逝水のにけかくれても世を過すかな

藤房此歌を見て、博識の人なれども、いかどしたりしや 此歌知り給はで、是古歌なる

とは思ひもよらず、帝の新製の歌なりと思ひ、「逝水のことばふしんはれず。かれが姓を

詠み入れられしとは見えたれども、逝水といふつゞきいかならん。其上速水の速の字に

逝ぐるの意なし」と難じたりければ、帝大に御氣色損じ、次の日藤房を召して、「東の歌枕

見てこよ」と追ひやり給ふ。藤房何の罪とはしらねども、忝慮にまかせ旅だちて、いつか

へりいつあふさかのせきならん、しられずしらぬ旅の行衛の心ほそく、ゆきくゝて武藏

野のはてなき道にかより、見わたせば、其廣きこと雲をしのぎ 霧にへだてゝ たどめ

のおよぶ所にかぎれり。春の末草葉のしけりし間、はるかにむかふに流るゝ川あるは、か

の調布さらす玉川にこそとおもへど、問ふべき人なく、川を目につけて行けども、曠野

の内遠近も目當違ひて、ゆけどもく、川ははるかむかふにありて同じ程なるはいかに

歌枕—歌に詠む
名所

調布さらす—
玉川にさらす
調布さらす—
昔の人の戀しき
やなぞい拾遺集